髪切虫

夢野久作

桐(きり)の青葉が蝙蝠(こうもり)色に重なり合って、その中の一枚か二枚かが時折り、あるかないかの夕風にヒラリヒラリと踊っている。

うるんだ宵星の二つ三つが、大きく大きくその上にまばたき初めると、遠く近くの魂がヒッソリと静まり返って、世界中が何となく生あたたかい悪魔のタメ息じみて来る。

その桐畠の片隅の一番低い葉蔭に在る、太い枝の岐(わか)れ目に、昼間から一匹の髪切虫(かみきりむし)がシッカリと獅嚙(しが)み付いていた。その髪切虫が、そうした悪魔気分に示唆(そそ)られて、ソロソロとその長い触角を動かし初めた。

髪切虫にとっては、触角を動かす事が、つまり、考える事であった。見る事であった。聞く事であった。嗅ぐ事であった。あらゆる感覚を一つに集めた全生命そのものであった。その卵白色とエナメル黒のダンダラの長い長い抛物線型に伸びた触角は、宇宙間に彷徨(ほうこう)している超時間的、超空間的の無限の波動を、自由自在の敏感さで受容(うけい)れるところの……そうして受入れつつユラリユラリと桐の葉蔭で旋回しているところの……変幻極まりない鋭敏な、小さい、生きた、アンテナそのものであった。

蝙蝠色に重なり合った桐の葉の群れのズット向うの、青い半円型の草山の蔭の地平線から、ボヘメヤ硝子（ガラス）色のサーチライトが、空気よりも軽く、淋しい、水か硝子のように当てどもなく、そこはかとなく撒（ま）き散らされていた。だからその草山の方向に、何気なく触角を向けている中（うち）に髪切虫は、何ともいえない大宇宙の神秘さをヒシヒシと感じ初めて来たのであった。

その草山の向うの、海の向うの、大陸の向うの、星座の向うの、まだまだずっと向うの、大地が作る半円球越しの何千里か向うの広い広い土地は、まだその日の正午近くらしかった。その焦げ付く程熱した、沙漠

の塵埃（ほこり）だらけの大空に、何千年か前から漂い残って、ニュートンの引力説に逆行し、アインシュタインの量子論を超越した虚空の行き止まりにぶつかって、極く極くデリケートな超短波の宇宙線に変化しながら、やっと引返して来たイーサーの霊動が、螢（ほたる）の光のように青臭く、淋しく、シンシンと髪切虫の触角に感じて来るのであった。

それはナイル河底の冥府（めいふ）の法廷で、今から一千九百六十五年前に、記録係のトートの神が読上げた、神秘的な、薄嗄（うすが）れた声が大空の涯から引返して来た旋律に相違なかった。

青桐の幹にシッカリと獅噛み付いた髪切虫の触角がピインと一直線に伸び切って、眼にも止まらぬ位すばらしく細かく……ブルルン……ブルルン……ブルブルブルルルルルルルルルルルルルル……と震動し初めた。

エジプトの　御代しろしめす
美しき　クレオパトラの
わが女王（きみ）は　笑はせたまはず」
国々は　うれひに鎖（とざ）し

民草は
朝まつり
夜のおとど
まさびしき
わが女王（きみ）は
ひそやかに

われはこれ
エジプトの
神々の
思ふこと

悲しみ濡れて
いとおろそかに
みあかし暗く
御閨（みねや）のうち
寝がへらせつゝ
歎かせたまふ」

美（く）はしの女王
御代を治めて
力をかねて
とゞかぬは無く

ねごふこと
何一つ
ただ一つ
わが知れる
ものみなは
たど〳〵と

天地は
ものみなは
めざめては
ちりひぢに

かなはぬはなし
不足なけれど
みちたらぬもの
生きとし生ける
などかくばかり
ものうきやらむ」

古くよごれて
汗ばみつかれ
又ゐねむりて
まみれ腐（くさ）れて

おなじ日と　おなじ月のみ
さびしらに　かゞよひ渡る」

われもまた　あだいたづらに
春秋（はるあき）を　老いて行くのみ
ああわれは　かくはかなくも
エジプトの　御代を知りつゝ
神々の　まもりうけつゝ
此の広き　山と河にも
おもしろく　をかしき事を
何一つ　見出でぬまゝに

老い行きて
御涙
ほのぼのと
折しまれ
女王様（わがきみ）の
カヤ〱と
わが女王（きみ）の
いづくより

死に果てむ身か」
ハラ〱と落ち
夜は明けわたる」
あなめづらしや
御声として
笑はせ給ふ」
御閨（みねや）ぬちに
迷ひ入りけむ

一匹の
かしこくも
此上（こよ）もなく
黄金（こがね）にも
御髪（おんぐし）を
啄（つい）ばませ
カヤ〱と

あなをかし
おもしろの

髪切虫を
捕はせ給ひ
興がらせつゝ
たとへ難かる
あたへ給ひて
喰（は）ませ給ひて
笑はせ給ふ」

髪切虫よ
髪切虫よ［＃底本では、この「髪切虫よ」だけ1字上がっている］

いつまでも

あかつきの
はてしなき
残りなく
丸坊主に

埃及（エジプト）の
はばからね
汝（なれ）こそは
青光る

髪切り飽かず」

雲の波打つ
わが黒髪を
切りつくさむとや
しつくさむとや」

御代を知る身を
髪切虫よ
虫の王なれ
髪切虫よ

美(うる)はしの
われ死なば
髪切の
かぎりなく
はてしなく
黒雲の
白浪の
匐ひまはり
闇といふ
女てふ

髪切虫よ」
汝(なれ)に慣ひて
虫と生まれて
恋を重ねて
卵を生みて
天ぎるきはみ
打ち寄るかぎり
且つ飛びかけり
闇に忍(しの)びて
女の髪(かみ)を

こと〴〵く
青空の
黒つちの
人間の
口づけの
美しき
永久永遠(とことは)に
あなをかし
おもしろの
ヒヒヒホホ

喰(たう)べつくして
たなびくところ
くゞまるところ
さまよふきはみ
結ぼほるかぎり
坊主あたまを
流行(はや)らせむかな
あなおもしろや
かみきり虫や
カヤ〳〵〳〵〳〵」

女王（きみ）の御代
大御心
歌宴（うたげ）して
腋下（わきした）の
こと〴〵く
かの虫に

さればわが
み誓ひの
御柩（みひつぎ）の
彼（か）の虫の

これより朗（ほが）らに
ひらけ浮かれて
舞ひ給ふとて
おん渦巻毛（うづまきげ）
抜かせ給ひて
あたへ給ひぬ」

女王（きみ）の御果て
固きにまかせ
御片隅に
木乃伊（ミイラ）を作り

秘めやかに
女王様(わがきみ)の
生(あ)れまさむ
美(うる)はしき
永久永遠(とことは)に

されば聞け
女王様(わがきみ)の
御柩(みひつぎ)の
女王様(わがきみ)の
髪切虫

納めまつりつ
髪切虫の
来世を待ちね
坊主頭を
流行(はや)らせむ為」

後の世の人
木乃伊(ミイラ)納めし
おん片隅に
御髪(みぐし)喰(は)みつゝ
今も啼(な)くなり

千年の　　　神秘をこめて

キッチ〱……ヰッチ〱……

……ギイ〱〱〱〱……」

「キッキッ。ギイギイギイギイギイ」

桐の葉蔭の髪切虫は、思わず啼いてしまった。その拍子にイーサーの霊動がフッツリと感じられなくなってしまったが………。

……しかし……それでも若い髪切虫は感激にふるえ上ったのであった。

ただ残念なことに、自分が果して二千年前の埃及(エジプト)女王クレオパトラの生れ変りなのか。それとも女王様の

寝棺の中に秘め置かれた髪切虫か、鱷河馬(アマム)にも喰われず、太陽神(オシリス)にも叱られずに二千年後の今日(こんにち)、輪廻転生(りんねてんしょう)の道理に恵まれて、呼吸(いき)を吹返して来たものか、その辺のところがサッパリ判明しなかったが、やがて間もなく、そんな事はどうでもいい事に気が付いたので、髪切虫は一層、朗かになった。

「そうだ。妾(わたし)はこれから恋を探さなければならない。そうして卵を沢山に生んで、可愛い子供をウジャウジャ撒(ま)き散らして、世界中の女の髪毛(かみ)をみんな朗かに啖(た)べさせて、一人残らずクルクル坊主にしてしまわなければならないのだわ」

けれども彼女は恋というものがドンナものか知らなかった。……一体恋なんていうものはドンナ処に、ドンナ風にして在るものだろう……と思って、ソロソロと桐の葉の上に匐い上りながらそこいらを見まわした。

桐畠の周囲の木立は、大きくまばたく夕星（ゆうずつ）の下（もと）に、青々と暮れ悩んでいた。その重なり合った枝と、葉と、幹の向うに白々と国道が横たわっていて、その向うのポプラの樹が行儀よく立並んだ間から、何だかわからない非常に美しいものが光って見えた。

それは何ともいえず匂やかな、柔かい薄桃色の絹

シェードの光であった。

「アラッ。まあ何て神秘な光でしょう。……妾は思い出したわ。虫の血で染めたパピルスの行燈(あんどん)を……ナイル河に臨んだ王宮の燈火(ともしび)を……妾の恋はキットあそこに在るのに違いないわ」

それから彼女はシッカリと畳まっている左右の羽根を生れて初めて、夕暗(ゆうやみ)の中でユルユルと拡げてみた。なやましい湿度を含んだ風が羽根の裏側にヒッソリと沁み渡った、と思うと彼女は早や、青い青い夕星の下の宵暗(よいやみ)を、はるかはるかの桃色の光に向って一直線に飛んで行くのであった。

「アッ。お父様……髪切虫が来ましたよ」

「ナニ。髪切虫が……」

「ええ。お父様が今夜は違った虫が捕りたいから誘蛾燈に赤いシェードを掛けとけって仰言(おっしゃ)ったでしょう。ですからそうしといたら蝶々は一匹も来ないでコンナ髪切虫が……」

「ううむ。面白いのう。甲虫は一体に赤い色が好きなのかも知れんのう」

「オヤッ。この髪切虫は普通のと違っている。この間お父様が大学で見せて下すった化石の髪切虫によく似てますよ。ね。ホラネ。身体(からだ)が瓢簞(ひょうたん)型になって、触

角がズット長くて……おまけにトテモ綺麗ですよ。卵(たまご)白色と、黒天鵞絨(びろうど)色のダンダラになって……ホラ……ネ……」

「フウム。成る程。これは珍しいのう。三千年ばかり前のツタンカーメンの墓の中から出て来た、実物の木乃伊(ミイラ)とはすこし色が違うが、これがホントの色じゃろう。今はモウこの世界から絶滅している種類だと聞いているのに……おかしいなあこんな処に居るのは……」

「その木乃伊(ミイラ)の棺の中から生き返った奴が埃及(エジプト)から飛んで来たのじゃないでしょうか」

「アハハハ。そうかも知れんのう。とにかく標本にしといて御覧……学界に報告してみるから……」

　青酸瓦斯（ガス）にみちみちた硝子（ガラス）の毒壺に入れられるべくピンセットで挟み上げられた時、彼女は思わず手足と触角を振りまわして悲鳴をあげた。今を最後の千古の神秘をこめて、

「ギチギチギチギチギチ。イチイチイチイチ。ギイギイギイ。カヤカヤ……カヤカヤカヤカヤカヤカヤ……」

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房
１９９２（平成４）年８月24日第1刷発行
入力：柴田卓治
校正：kazuishi
２０００年10月25日公開
２００６年３月８日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。